



# 町民文芸

## 只見短歌会

四月詠草

大塚栄一

指導

放射能恐れて近くの公園に桜咲けども人等は寄らず

古川 英子

雪消えて田の土手の面の出でくれば稲作せねど心忙し

馬場 八智

地震にて傷みし屋根の修復は三年先と孫は嘆きつ

皆川 恒子

お茶を飲むわれを避けつつ駆け回る四人の孫よりガムの匂ひす

目黒 富子

いつもより残雪多き過ごしるる施設の窓より遠き山眺む

五十嵐英子

老夫婦二人のみ住む家裏の大き梅の木咲き盛りをり

齊藤ちひろ

軋む音立てて寄せ来る大津波テレビに見つつ息を呑み込む

五十嵐夏美

福島と名の付く物は売れぬとふ原発事故の風評怖し

渡部ゆき子

かつてなき津波と地震に襲はれし被災地は日々報道さるる

渡部ヨリ子

雨の夜に濡れ来し飼猫戸の外に甘えて鳴くにタオル持ちゆく

新国 洋子

(出 詠 順)

## 只見俳句会

五月例会

目黒十一

指導

土筆手に思いをはせる震災地  
月おぼろ「あさひが丘」を退出す

邦 男

下萌やもも色の豚放たれて  
別れ霜瓦礫の底に田畑あり

笑 羊

田面を鳶ひくく飛ぶ夏めく日  
蛇穴を出でて大きく口と舌

恒 夫

廢校の桜二本の大満開  
お地蔵の錫杖鳴れり春埃

洋 子

地震されど蕾ふくらむ牡丹かな  
春疾風ずり落つぐしのトタン鳴る

吉 児

雪解けの山新しき眩しさよ  
苗床の雪割りいるや余震来る

一 穂

足早な影の行き来や春障子  
全山の木の芽萌え出す雨二日

隆 堂

春の川流され下る鴨一羽  
瀬の音や一本咲きし花辛夷

敦 子

初音聞く三石様へ願ほどき  
先頭が止まるうぐひすの谷渡り

邦 夫

東風怖や高々と立つ鯉幟  
夕灯す腕に蚊口のあたらしく

礼

番鴨裏の水辺に再来す  
山肌の黒々として峽の春

リウコ

卒然と友の逝きたるなごり雪  
被災地の水仙手折り胸に抱く

修 一

空樽を干して一日暖かし  
手を振っている母が居り新入生

康 女